もも・ネクタリン情報　No.16

令和7年　2月21日発行
JAグリーン長野営農販売部・経済部

【もも・ネクタリン共通薬剤防除】

◆コスカシバ対策の特別薬剤散布について

1．散布時期：発芽前（３月初旬頃）　　散布日　　月　　日

2．調 合 量：水９９ℓ当り　※混用順に記載。

農薬名	使用量	対象病害虫	収穫前
展　　着　　剤	１０mℓ	―	―
ガットキラー乳剤	１ℓ	コスカシバ	休眠期

◆せん孔細菌病対策について

枝先端に花腐れ・枝枯れしているものは、灰星病の可能性も高いが、せん孔細菌病である事もある。枝の先端が、炭が固まったようになっているものも見られる。いずれの場合でも、剪除は必要。

1．春型枝病斑の剪除がもっとも重要になる。できるだけ、早く剪除し感染拡大防止を行う事で、かなり被害を軽減できる。薬剤防除だけでは、防ぎきれない。難病害であるため、耕種的防除が重要になる。

2．薬剤防除の効果は完全ではないが重要。
散布量をしっかり撒く事。発生の多い園、場所、外周もしっかりと撒く事が重要。

◆ウメシロカイガラムシ対策について

ウメシロカイガラムシの発生園は、ブラシやタワシ等で丁寧にこすり落とすことにより、薬剤防除効果も上がる。

◆灰星病対策について

伝染源の除去のため次の対策を徹底する。
①ミイラ果の処分。樹上・園内にあるものを、土中に埋める。
②整枝・剪定時に先枯れしているものを剪除処分する。

◆マンガン欠乏対策について

1．毎年、マンガン欠乏がみられる園は、下記資材を施用する。
①施用時期　　：３月
②施用資材・量：硫酸マンガン　１樹当り０．５～１kg。

◆強樹勢樹対策資材の施用について

1．強樹勢樹対策に、下記資材を施用する。
①施用時期　　：３月上旬
②施用資材・量：スミクリン１０ａ当り２袋
※土壌診断により、リン酸過剰園は、施用を控える。

◆早期摘蕾の実施について　≪重要≫

1．摘蕾のねらい
①貯蔵養分の無駄な消耗を防ぐ。
②幼果の肥大・新梢の伸長・細根の発達を助けて葉枚数を早く確保する。
※生育成熟期間の短い早・中生種ほど恩恵が大きく出る。特にあかつき・白鳳・なつっこ。

③摘果作業の効率化を図り、生理障害（核割れ・落果）の軽減をする。

※鈴なりの果実を一度に摘果して落とすと生理障害の原因になるが、摘蕾では影響が少ない。

２．実施時期　本来は、生育が進んでからが時期となるが、作業が間に合わない場合があるため作業性が悪いが早期から実施する（効果は高まる）

３．実施方法

①葉芽をきずつけないように薄い手袋をはめて行う。

②長･中果枝は片方の手で枝の先端を摘み､他の手で先端から基部に向けて蕾をこすり落とす。

③親指と人差し指で軽く挟んで、上下の蕾をしごいてもよい。
短果枝は指先で枝を揉むようにして落とす。

４．品種別摘蕾の程度

結実が確保できる場合は、初期成育向上、玉肥大向上、核障害低減を目的とし下記基準より、「強い摘蕾」を実施してよい。

①全蕾の７０～８０％落としてよい品種・・・白鳳系・あかつき・なつっこ

②５０～６０％落としてよい品種・・・白根白桃・水野ネクタリン

③軽く落とす品種（毎年結実が安定している場合は、多めにおとしてよい）
・・・川中島白鳳・川中島白桃・黄金桃・スイートリッチ
サマークリスタル・メイグランド・スイートクリスタル・フレーバートップ
ファンタジア・秀峰

※モモせん孔細菌病対策で枝を多く置いている場合は摘蕾をしっかりと行い、今後の作業が遅れないように進める。摘果が早めに終わらせ→袋掛けを早め→感染時期を少なくさせる。

◆凍害防止対策の徹底について

１.今後の気温によっては､凍害並びに胴枯病の発生が予想される｡暖冬が続くと樹液が上がり、その後に寒の戻りで低温に遭遇すると成木でも凍害を受け枯死するものが多くなる。

２．若木で樹勢が強い樹や、幼木（結実開始前後）は、特に凍害を受けやすいので丁寧に防寒する。特に桃などの核果類は弱いので、若木のせん定には注意し、せん定も最後にする。

３.主幹･主枝･亜主枝に白塗材を塗布し樹の温度上昇を軽減させ１日の温度差を少なくさせる。なお白塗材は温かい日が塗りやすい。

④切り口には乾燥しないうちに塗布剤を塗布する。

⑤排水の悪い所は排水対策を実施し水はけを良くさせる。

⑥樹勢が弱まったり傷んだ樹は凍害の危険性が高いので、ワラが用意できるのであれば今からでも巻いて保護する。